

《補論》

東方世界における自由学芸の諸相

土橋 茂樹

以下はシンポジウム当日に、参照資料として配布したもののほぼ再録である。あくまで議論の多様な展開に資するよう東方世界における主要なトピックを提供しただけのものであり、紙幅の制約も加わっておよそ論文の体をなさない箇条書きに留まるものであることを御容赦いただきたい。

1. アレクサンドレイアのフィロン (c. 20 BC-c. 45)

— ΠΕΡΙ ΤΗΣ ΠΡΟΣ ΤΑ ΠΡΟΠΑΙΔΕΥΜΑΤΑ ΣΥΝΟΔΟΥ 『予備教育のための交わりについて』 (*De congressu quaerendae eruditionis gratia*)
における ἐγκύκλιος μουσική —

1-1. アレゴリーの解釈

フィロンは同書において、『創世記』16:1~6のサライとエジプト人ハガルの関係に以下のようなアレゴリーの解釈を加える(なお、以下で()内の数字は当該書の節番号を示す)。まず、サライは女主人であるがゆえに「知恵」「徳」「学知」^{ソフィア} ^{エピステーメ}を象徴するのに対して、ハガルは女奴隷であるがゆえに ἐγκύκλιος μουσική (10): μέση παιδεία (14)を、さらにハガルの生地エジプトは身体性、感覚を象徴するものと解釈される。ここでは ἐγκύκλιος μουσική に関して以下の4点が重要である。

- ① 「知恵の女奴隷は、予備教育 (προπαιδεύματα) を通じて得られる ἐγκύκλιος μουσική である。」(10) (ここでの μουσική とは広義の用法で παιδεία とほぼ同義に取る)

- ②「低次で ἐγκύκλιος な諸科目によってなされる低次な教育 μέση παιδεία」(14)
- ③「より低次の教育」(μέση παιδεία)：「完全な徳を表すサライの女奴隷であるハガルは、より低次の教育を表している。」(*De posteritate Caini*, 130)
- ④ハガルがエジプト人であることからのアレゴリー的解釈：「ἐγκύκλιος θεωρία に耽る者や博識 (πολυμάθεια) の徒は、必然的に地上的、エジプト的な身体と結ばれねばならない。……哲学することの主要部分は感覚世界における諸事象から得られるが、感覚なしにそうした諸事象を正確に知ることは不可能である。魂の身体的部分である感覚は、魂全体を収めた容器にしっかり固定されており、この魂の容器が象徴的にエジプトと呼ばれる。」(20-21)

1-2. ἐγκύκλιος μουσική としての文法、音楽、幾何学、修辞学、弁証術

- ①文法 (γραμματική)：
「文法は詩人たちや歴史家たちから得られる知識を教え、知識 (νόσις) と博識 (πολυμάθεια) を生み出す。」(15)
- ②音楽 (μουσική)：
「音楽は、リズムのなさをリズムによって、不調和ハルモニアを調和によって、調子はずれや不協和メロスを旋律によって克服し、不協和音を協和音シユンフォーニアにするだろう。」(16)
- ③幾何学 (γεωμετρία)：
「幾何学は、学ぶことを愛する魂の内に等しさと比例の種子を蒔き、その途絶えることのない理論の精妙さによって、正義への熱情を生み出すだろう。」(16)
- ④修辞学 (ῥητορικὴ)：
「修辞学は、知性を事実の発見のために鋭くし、理性を表現のために訓練し鍛え上げ、人を真の弁論家にするだろう。」(17)
- ⑤弁証術 (διαλεκτική)：
「弁証術は、ある人たちが言ったように修辞学の双子の姉妹であり、真の議論を虚偽の議論から識別し、詭弁のまことしやかさを論駁し、魂の大きな災いである欺瞞を癒すだろう。」(17)

1-3. 教育の段階的な展開 — ἐγκύκλιος μουσική → 哲学 → 神の知恵

- ①「物的なものから始めることなしに、存在するいかなる非物的なものの思考もあり得ない。……したがって、可知的世界も感覚的世界から理解されたのである。」(De somniis, I 187f.)
- ②「哲学は知恵の探求であり、知恵は神的なものや人間的なもの、およびそれら両者の原因についての知識である。それゆえ、ちょうど ἐγκύκλιος μουσική が哲学の奴隷であるように、哲学もまた知恵の奴隷である。」(79-80)

2. 東方での自由学芸七科の確立の遅れ (?)

Martianus Capella, *De nuptiis Philologiae et Mercurii* は、おそらく 5 世紀始め、自由七科各々 (trivium: 文法, 修辞学, 弁証論, quadrivium: 幾何学, 数学, 天文学, 音楽。ウァロ (前 116-27 年) の初期論考では、医学と建築学が扱われていたが、カペラでは、無言のまま登場している) に初めて 1 巻ずつを割り当てることで自由七科の地位を確立した書である。対して、このジャンルでのギリシア語圏の最初の論稿は、さらに 600 年近く後の 1008 年 に書かれた無名氏 (かつてはプセロスに帰せられていた) による論理と四科に関する著作である。

3. quadrivium のギリシア語訳の初出

ポエティウスによるラテン語 quadrivium のギリシア語訳 (ἡ μαθηματικὴ τετρακτὺς) が最初に見出されるのは、842 年にイグナティオスによって書かれた『ニケフォロス小伝』(Nicephori opuscula historica) においてである。ただし、イグナティオスはエウセビオスと同様、四福音書を指す際にも τετρακτὺς という語を使用しており(「四福音書の聖なる四つ組」[ἡ ἁγία τῶν εὐαγγελίων τετρακτὺς] Eusebius, HE, III, 25), 専ら「四科」だけを意味する術語とはみなされていなかったものと思われる。

4. ソフィストであるリバニオスとバシレイオスおよびクリュストモスの関係

古典期のソフィストとは性格が異なる 2~4 世紀頃のソフィストの一

人であるリバニオスは、著名な教父バシレイオスやクリュソストモスが教えを受けた人物として伝えられている。しかし、バシレイオスの場合、かつて信じられていたようにアテナイ留学の後にリバニオスの下で自らの修辞学の完成を図ったのではなく、逆にアテナイに向かう途上、コンスタンティノポリスで、短期間ではあるが幾人かの哲学者や修辞学者の教えを受けることができた内の一人がリバニオスであったと言われる(ニュッサのグレゴリオスの証言 [書簡 13])¹⁾。しかし、両者の関係はそれだけにとどまらず、その後、書簡の往復が何度か行われた(それら書簡の真贋については現在も議論がある)。少なくとも、その内の真筆と思われる書簡において、バシレイオスが自身の郷土であるカイサレイアの有力な若者をリバニオスに推薦していたことが知られる。当時のソフィストが占めていた高い社会的地位が垣間見られる。

5. 東方における初等・中等教育のカリキュラム²⁾

まず、ビザンツではなによりもギリシア古典文芸の伝承が一貫して教育の柱となっており、その基本は15世紀に至るまで変わることがなかった。

そのもっとも基礎となる課程としては、幼児に読み書き、算術の基礎を教えることが初等教育の定番だった。幼児たちは、字母、音節、単語といった順に覚えていき、イソップ寓話を学び、もっと後の時代には、標準的な初等科の教科書として『詩篇』を用い、暗唱できるまで繰り返し音読させられた。算術の基礎は、指ないし石を用いた初歩的算術であった。

その段階が過ぎると、いわゆる中等教育に進むが、ここではまず三科が、次いでそれらの習得後に四科へと進んだ。三科の基盤は、あくまでギリシア古典文芸の読みと暗記にある。主要テキストは、ホメロスのイリアス(オデュッセイアは使用される頻度が落ちる)、アイスキュロス、

1) Cf. R. Cribiore, *The School of Libanius in Late Antique Antioch*, Princeton U. P., 2007, p. 100.

2) Cf. Y. L. Too (ed.), *Education in Greek and Roman Antiquity*, Brill, 2001; R. Cribiore, *Gymnastics of the Mind — Greek Education in Hellenistic and Roman Egypt*, Princeton U. P., 2001; T. Morgan, *Literate Education in the Hellenistic and Roman Worlds*, Cambridge, 1998.

ソフォクレス、エウリピデスという三大悲劇作家の9作品、アリストファネスの3喜劇、さらにヘシオドス、ピンダロス、テオクリトス、ルキアノス、デモステネス、クセノフォンなどだが、これらに加えてプラトン対話篇、さらに詩篇、ナジアンゾスのグレゴリオスの詩、といったところがカリキュラム中に具体的に挙げられている。

文法は、ディオニュシオス・トラクス（前2世紀の文法学者）がビザンツ期を通して主要テキストとして用いられた。論理学（あるいは哲学）は、上掲のテキスト中にプラトンの対話篇があることから、哲学的著作を暗唱する中で学び取っていったのではないかと推測される。

三科の中でもっとも重要視された修辞学は、^{プロキユムナスマテ}模範文例を用いて生徒たちに短文を作っていく練習を繰り返させた。その際、短文の主題として、古代ギリシア神話、よく知られた格言、歴史のあるいは神話的人物に向けられた賛辞などが好んで用いられたが、もっともポピュラーだったのは、ある特定の人物を模倣することによる性格描写と工芸作品や建築物の記述だった。暗記した模範文例を用いて、こうした主題に関する短文を構成していく練習を繰り返していくことで、修辞の能力を高めていったわけである。

四科に関しては、数学がゲラサのニコマコスの数論（1～2世紀）、幾何学がエウクレイデス、天文学や音階理論がプトレマイオスに基づいているところはボエティウスなどと同様の背景があったものと考えられる。

ボエティウスと自由学芸の伝統

周 藤 多 紀

ボエティウスは、自由学芸の伝統を語るうえで必ず言及される人物の一人である。彼は、マルティアヌス・カペラの『フィロロギアとメルクリウスの結婚』のように、七つの自由学芸を列挙して論じているわけで